

---

# 知と知の死闘 第二幕

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

知と知の死闘 第二幕

### 【Nコード】

N6982A

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

九十三年。昨年の雪辱を忘れないヤクルトは巨人を見事蹴散らし堂々たる実力でセリーグを制し宿敵西武に立ち向かう。対する西武は戦力で追いつかれようと森の知略があった。野村と森、二人の知将の最後の戦いの火蓋が切って落とされた。『知と知の死闘』の続編です。勝利の女神が微笑むのはどちらか。一代の知将二人の知略、そして選手達の全力の勝負がここにあります。

## 第一章

### 知と知の死闘

#### 第二幕

九三年は長嶋茂雄が巨人の監督に復帰した年だった。世間の目は彼に集中した。大物ルーキー松井秀喜も入団した。これは毎年の事であるが誰もが巨人を優勝候補筆頭に挙げていた。

「フン、提灯持ち共が。今のうちに精々言っとくんやな」

これは誰が言ったか。テレビを見て誰かが言った。去年の日本シリーズの死闘をその目で見た者にとっては巨人一色で提灯持ちをしている連中が実に滑稽に見えた。これも今にはじまったことではない。我が国のスポーツ報道のどうしようもない病骨髄に至ることである。気付く時はその球団と自分達が奈落の底に落ちた時であろう。いや、もう既に落ちていていまだに気付いていないだけかもしれないが。それが我が国のスポーツ報道の実態である。

その愚劣で滑稽な報道に心動かされず臥薪嘗胆する者達がいた。ヤクルトナイン、そして野村である。彼等は巨人なぞ眼中になかった。王者西武を倒す、それだけが彼等の望みだった。

ペナントはヤクルト有利に進んだ。巨人は三位、ヤクルトは長嶋巨人を叩き潰し見事にセリーグを連覇した。所詮提灯持ち共の予想なぞあてにはならないということである。邪道は邪道、正道には決して勝てはしない。戦略戦術を解さぬ愚将が百戦錬磨の知将に勝てるのか。言うまでもないことである。提灯持ち共にはそうした簡単なことさえ理解することが出来ないのである。

そしてヤクルトには新たな顔があった。昨年故障で日本シリーズには出られなかった西村龍次、川崎憲次郎。そしてストッパーとして高津臣悟の姿もあった。ストッパー不在に泣かされた昨年とは違い今年を抑えもいた。昨年よりもその戦力は増していた。

対する西武はデストラーデが抜けた。だがその戦力は万全である。

ペナントも有利に進めた。しかし最後の最後までもたついでしまった。「なにをやつとるんだ」

森がこぼした。マジック1から中々勝てないのだ。

だがようやく勝った。しかしチーム内に妙なしこりが出来た。

左のエース工藤が登板拒否を起こしたのだ。

工藤は頭脳派えあり自分自身の調整には人一倍気を遣う。そして我が強い。このシーズンでは森に今シーズンの最終登板を言い渡されると独自の調整に入った。シーズンを睨んでのことである。だがもたつく状況に森は彼に再び登板を要請した。

「話が違う」

彼は憤慨した。登板を拒否したのだ。おそらくその根底には森の投手に対する考えも知っていた為の感情的なものもあつたのである。

「我が俣で身勝手に自己顕示欲が強いのが投手型人間」

森はこう言った。野村もそれは同じであつたが。共に捕手出身であり投手をは付き合いが深い。また対立も多い。その事から生じた見方だろう。ただでさえ陰気な雰囲気か拭いきれず特定の人物には露骨に嫌われる彼等だがこつした発言がそれを助長するのであろう。だが森はそれをあえて無視した。何よりもチームがシリーズに勝つ事が重要であつた。

しかし彼は気付いていた。自分が率いるチームが老いようとしているのを。それは昨年のシリーズで薄々感じられたしこのペナントで顕著になつた。何よりもマジック1でもたつきがそれを物語つていた。

だがそれでもなお戦力は西武の方が上というのが多くの者の見方であつた。しかし予想は西武圧倒的有利と言われた昨シーズンとは違いヤクルトが僅かに上回っていた。それが今の西武の状況をも表わしていた。

勢いはヤクルトにある、そしてそのヤクルトは明らかに強くなつている。対する西武は老いている。だが腐つても王者西武だ。そう

簡単にはいかない。両者の血戦の幕が再び開けようとしていた。

## 第二章

まずは第一戦、舞台は西武球場。ヤクルトの先発は荒木、西武は工藤であつた。まずは一回表のヤクルトの攻撃である。

工藤はそのペナント終了間際の騒動のせい、か制球が定まらない。そこへ主砲パウエルが登場する。

パウエルは昨年のシリーズで十六三振。特に第二、三、四戦といつた投手戦においては完全に抑えられそれがヤクルトの直接の敗因であると言われていた。その彼が今バッターボックスに入った。

彼は燃えていた。その顔は赤くなつておりまるで赤鬼であつた。

そこへいまだ制球の定まらぬ工藤がいた。

「まずいな……」

森は呟いた。単に制球が定まらないだけではない。工藤は左投手であるが何故か左打者に弱い。パウエルは左打者である。結果は陽の目を見るより明らかだつた。

四球目。パウエルのバットが一閃した。打球は西武球場の左中間の芝生に飛び込んだ。先制スリーランホームランだつた。

第一試合第一打席での大砲のアーチ、これはシリーズにおいてはかなりの効果がある。それは他ならぬ西武自身がよく知っている。何故なら西武の大砲デストラーデの得意技だつたからだ。

しかし彼は今ベンチにいない。大リーガーとしてスタンドでスーツを着て試合を観戦していたのだ。

この一打が波を作つた。その裏荒木は制球が定まらず、石毛に死球を与え清原にタイムリーを打たれる。しかし彼はここで踏ん張つた。その回はそれだけで凌いだ。

対する工藤は一回三分の一で降板する。だが荒木は強気の内角攻めと緩いカーブで西武打線を抑える。そして四失点ながら六回まで投げ抜いた。

対するヤクルトは池山もアーチを放ち順調に得点を重ねる。西武

も伊東と秋山がホームランを放つが追いつけない。試合は八対五でヤクルトの勝利に終わった。荒木はシリーズ初勝利だった。怪我の影響で一三〇代のストレートしか投げられないが見事に西武打線を凌ぎきった。

「ようやった」

野村が荒木を褒め称える。かつて甲子園のプリンスと言われた男はその言葉ににこりと笑った。

「今年も最初は落としたか」

森はスコアボードを見ながら呟いた。だが彼は次の試合こそ最も重要と考えている。到って冷静であった。

「次は御前だ」

森は側にいた背番号十八番に対して言った。

「はい」

その十八番は黙って答えた。エースナンバー、この背番号を着けている者はチームの柱となる男である。そして森が今声をかけた男もまたそうであった。

次の試合、西武はその十八番、郭を投入してきた。昨年のシリーズでヤクルト打線を完璧に抑えていた男である。その速球と高速スライダーが再び牙を剥かんとしていた。

対するヤクルトの先発は西村。制球難で有名な男である。どう見ても見劣りのする先発カードであった。

しかし勝負は蓋を開けてみないとわからないのも道理である。ヤクルトがまず古田のショートゴロの間に一点を先制する。だが対する西武も西村の立ち上がりを攻め清原のタイムリー等であっさりと逆転する。しかし西村はその後不調なりに立ち直り失点を許さない。そして二回は両者無得点のままであった。そして三回表、ヤクルトの攻撃がはじまる。

昨年は彼の前に為す術も無かったヤクルト打線。しかし今年は違っていた。その餓えた牙を今彼に対して剥き出したのだ。

四連打を浴びせる。そして何と三点をもぎ取った。彼はこの回ワ

ンアウトを取る事も出来ずマウンドを降りた。これでこの試合の流れはヤクルトに大きく傾いた。

ヤクルトは四回にも一点を追加する。これで試合はほぼ決まってしまった。西村は西武打線の反撃を許さない。そして彼は六回と三分の二を凌いだ。あとはヤクルトも切り札がいる。

高津。その前のシーズンまでは先発だった男である。そして昨年のこの時期は二軍落ちをし黒潮リーグに参加していた。だが野村から神宮に呼び出されていたのだ。

「あの連中の投球をよく見とけ」

野村は彼に言った。そして彼は神宮の観客席に向かった。

野村が彼に見る、と言った連中とは西武のストッパーである鹿取と潮崎だった。高津はサイドスローからのシンカーを武器とする。

それは今彼の目の前で投げている二人も同じであった。彼と西武の二人のストッパーはそのタイプが実によく似ていたのだ。

「監督が俺に見る言うたんはあれか……」

高津はその投球をまじまじと見た。そのうえで野村は彼にストッパー転向を言い渡したのだ。

彼はそれに応えた。それまでストッパー不在で岡林がそれも兼ねるといふ状況であったが今ここに不動の守護神が誕生した。万全な抑えを得てヤクルトはこのシーズンを勝ち抜いたのだ。

彼は投げた。そのシンカーが唸り声をあげ西武のバッターの膝元に、外に入る。そして西武打線を無失点に抑えた。

ヤクルトは敵地で連勝した。これは大きかった。シリーズの趨勢はヤクルトに大きく傾こうとしていた。

「いいぞ、このまま四連勝だ！」

敵地に入り込んでいたヤクルトファン達が緑の傘を乱舞させ絶叫する。そして野村を報道陣が取り囲む。

「このままだとまずいな……」

森はそれを見て呟いた。彼はシリーズにおける勢いの怖ろしさを知っていた。短期決戦ではそれが大きく影響するのだ。

今までその勢いで勝ち、負けた事は多い。それを彼は自身の目で見てきているのだ。

次の試合から舞台は神宮に移る。言うまでも無く地の利はヤクルトにある。

一歩間違えれば勢いは完全にヤクルトのものになりかねない。この試合を落とせば西武は絶体絶命の状況に追い詰められる事となる。そうすれば本当に四連敗も有り得る。森の脳裏に危機を知らせる信号が点滅していた。

「ヤクルトの先発は誰だ……」

森はヤクルト投手陣のデータを見た。そして野村の性格と照らし合わせる。お互いに言える事だが野村は同じ捕手出身、また付き合っても長い。だから彼の考えている事はある程度は読める。その上で彼は作戦を計画した。

「あの男ならば、これだ」

森は意を決した。そして神宮に乗り込んだ。

### 第三章

ヤクルトファンで埋め尽くされた神宮球場、そこで両チームの先発メンバーが発表される。

西武の先発は渡辺久信、これはある程度予想されていた。対するヤクルトは伊東であった。

「今日はもらった」

森は先発の名を聞いた時言った。そしてナインに自分の作戦を伝えた。

「……いいな、思いきっていけ」

「はい」

ナインは彼の言葉に頷いた。そしてグラウンドに散っていった。

西武の先発渡辺が荒れ気味のストレートが武器である。コントロールが定まらないがそれがかえってヤクルト打線を苦しめる。

「渡辺は抑えてくれるな」

森は彼に対しては安心して見ていた。そして問題の作戦である。

この日の伊東の調子は悪くなかった。だが森は彼の投球データから作戦を割り出していた。

変化球が多い。カーブ、シュート、フォークと多彩である。とりわけ内角攻めが強い。

彼はその内角攻めの球を棄てさせた。そして初球から積極的に打たせたのだ。

作戦は成功した。伊東は三回に六失点を許し降板した。これで試合は決まった。

渡辺は荒れながらもヤクルト打線を押さえる。二失点ながら二安打しか許さなかった。彼から潮崎にリレーし試合を進めた。西武はさらに一点を追加し七対二で勝利を収めた。

「あいつもやりおんの」

森は三塁側ベンチにいる森を見て言った。森は彼が自分を見てい

る事に気付いたがあえて気付かないふりをしてベンチを後にした。  
「わしに腹のうちを読ませんつもりか。けれどそうはいかんで」  
二人はその脳裏にこれからのシリーズの行方を浮かべていた。そ  
して策を練っていた。

## 第四章

第四戦。この試合に勝てばヤクルトは王手をかける。西武が勝てば五分と五分に持ち込む。そうなれば西武は息を吹き返すだろう。このシリーズのターニングポイントとなるであろう。試合だった。

西武の先発は前のシリーズMVPの石井丈裕、対するヤクルトは川崎であった。

彼は昨年右肘の故障により一度もマウンドに立っていない。そしてこのシーズンは復活し十勝を挙げたものの胴上げの時には風邪をひきいなかった。巡り合わせが悪いのか運の無い話であった。だからこそこのシリーズにかける意気は違っていた。

彼は投げた。飛ばした。この日神宮はセンターからホームにかけて強い風が吹いていた。彼はそれにボールを乗せストリート主体のピッチングをし西武打線を寄せ付けない。その彼に対して打線も応えた。

四回裏古田、広沢等の連打で一死満塁のチャンスを作る。ここでバッターボックスに池山が入る。

池山は『ブンブン丸』のあだ名が示す通りパワーヒッターとして知られている。とにかく豪快なバッティングが有名な男である。

当然この時も長打を狙っていると誰もが思っていた。だが彼は違った。

彼はこの時神宮に吹く強い風を意識していた。そして長打狙いを止めた。

石井の手からボールが放たれた。池山は足を高く上げる。いや、上げなかった。何と風に逆らわず右に流したのだ。

ボールは外野フライとなった。そしてそれが犠牲フライとなり一点が入った。貴重な先制点だった。

いつもの強打を棄てたチームプレーに徹したバッティング、それが功を奏したのである。

試合は進み八回表、西武の攻撃であった。川崎はコントロールを崩し連続で四球を出す。西武は二死一、二塁。森はここで二塁ランナーに代走で苦篠誠治を送る。俊足の男である。

バッターは三番鈴木健。一発がある。だが野村はバックホームも考慮に入れ外野陣には中間で守らせていた。

だがセンターの飯田は違っていた。野村のサインを無視して定位置より前に出て守っていた。

「あいつは何を考えるとるんや」

野村は眉をひそめた。だがベンチからではどうしようもない。とりあえずは黙っていた。

川崎は初球を投げた。ストレートだ。鈴木はそのストレートを弾き返した。ボールはセンター前に飛んだ。

二塁ランナー苦篠は三塁ベースに向かう。伊原がその右手を激しく回している。それに応え三塁を回った。誰もがそれを見て思った。

「同点だ！」

神宮の社を悲鳴と歓声が覆った。川崎も覚悟した。森はニヤリ、と笑った。

だが次の瞬間森の顔は凍り付いた。彼は信じられないものを見たのだ。

何と飯田がボールに突進している。そしてそのボールを絶妙なステップで素早く処理するとすぐさま全力で投げた。白い球が今流星となって神宮の緑の芝の上に放たれた。

ボールはダイレクトでホームを守る古田のミットに吸い込まれた。苦篠は驚愕した。だが彼もその足を知られた男である。そのまま突入し古田の鉄壁の防御を打ち砕かんとする。

両者は激突した。球場が一瞬静まり返った。

「セーフか？」

「それともアウトか？」

皆ホームに目を集中させる。主審の手がゆっくりと動きはじめる。彼はその上げた手を次第に拳にしていく。そして突き上げた。

「アウト！」

彼は叫んだ。その瞬間神宮は再び歓声と悲鳴に包まれた。飯田のまさかのファインプレーであった。

このプレーが決め手となった。最後は高津がマウンドに上がり西武を退けた。一対零、かろうじて、だが確かに掴んだ勝利であった。これでヤクルトは王手をかけた。

時として野球は守備がものをいう。五九年のシリーズにおいて大沢の守備が杉浦を助け、七九年前期の近鉄の優勝が平野の執念のバツクホームで決められたように。それを世に知らしめたのが他ならぬ西武であった。西武の強さはその絶対的な守備によるところも大きかったのだ。

その西武を驚かせた飯田の守備、それこそがヤクルトの成長の証であったのだ。

このシリーズ、西武にとってホームは遠かった。前年以上に苦しい戦いであった。

「これで後が無くなったな」

森は静かに呟いた。最早劣勢は明らかであった。

「だが負けるわけにはいかん」

森もまた一代の知将である。そう簡単に負けてはその名が廃る。そして彼はまだ自分のチームの力を、そして勝利を信じていた。

「見せてやる、うちの底力を」

西武はその土壇場での恐ろしいまでのしぶとさで知られていた。彼はそれを見せつけるつもりであった。

誰にか。野村やヤクルトナインにか。確かにそうである。だが彼等に対してだけではない。自分達を応援し、日本一を待ち望んでいるファンにも見せたかったのだ。

それがプロだ。勝ちファンと喜びを分かち合う。その為にも彼は諦めるわけにはいかなかった。

## 第五章

第五戦、ここで負ければ西武は全てが終わる。ヤクルトは悲願の日本一だ。野村には余裕が見られた。だが森の顔はまさに決死の様子であった。

ヤクルトの先発は宮本賢治、右のアンダースローの変則派である。対する西武の先発は工藤。第一戦で打ち崩されているがここは彼のマウンド度胸にかけた。

西武は二回に清原がこのシリーズはじめてのアーチを放つ。これで西武が先制した。

ヤクルト打線は執拗に工藤を狙う。しかし彼も幾多の修羅場を潜り抜けてきた男である。それを寄せ付けない。鹿取にスイッチし西武は逃げ切りを図る。

だがヤクルトは本拠地での胴上げ果たさんとする。八回裏広沢がタイムリーで一点を返す。

それでも西武は逃げようと必死である。遂に追いつがる燕に獅子が牙を剥いた。

九回、満塁の状況でバッターボックスに立つのは鈴木健。彼のバットが一閃した。

打球はスタンドに叩き込まれた。満塁ホームランであった。試合はこれで決まった。

終わってみれば七対二、西武の大勝利であった。王者の貫禄を見せ本拠地での胴上げを狙うヤクルトを退けたのであった。

「これで所沢まで首がもったな」  
森は安堵した声で言った。そして彼は本拠地である西武球場へと帰っていった。

次の日は移動日、そして試合は三十日に行なわれる予定であった。だが雨が降った。試合は一日遅らされることとなった。

「この雨がどう出るかな」

二人の将は呟いた。この雨が両者に対し少なからず影響を与える事は明らかであった。

だがそれが吉と出るか凶と出るか。それは神のみぞ知っている事であった。

## 第六章

そして幕を開けた第六戦、先発は第二戦と同じく郭と西村であった。

郭は安定した立ち上がりを見せる。しかし対する西村は相変わらず不安な立ち上がりであり石毛に死球を当てている。

「これがノムさんの野球だよ。何がID野球だよ」

石毛は冗談混じりに言った。彼も西村の制球難は知っていたが予想以上の荒れようであった。

しかしそれでも何とか抑えていた。三回まで両者無得点であった。

四回裏、勝負の分かれ目となる機会が生じた。満塁でバッターボックスに秋山が入る。

秋山はこのシリーズではホームラン以外のヒットは無い。元々三振が異様に多くバッティングの粗い傾向のある男であるがこれはかなり極端であった。

だがこの時に彼のような男が怖いのも事実である。シリーズでは毎回派手なアーチを放っている。特に九〇年の巨人戦で桑田から放ったアーチは有名である。呆然とする桑田の目の前で得意のバク転をしてみせた。他の選手なら許し難い挑発であるが秋山だからこそ許される行為であった。彼はダイエーに移ってからも攻守に渡ってチームを支えた。ここぞという時には清原やデストラーデよりも怖ろしい男である。

西村、古田のバッテリーは彼の長打を警戒した。そして詰まらせてダブルプレーを狙った。内角へシュートを放った。

だが内角への弱さで知られる清原ならこれは効果があっただろう。しかし相手は秋山である。その抜群の運動神経が発揮された。

秋山は振り抜いた。打球は一直線に飛ぶ。打った瞬間西武ファンは総立ちとなり大歓声が起こった。

西村はハツとなり打球が飛んでいったレフトスタンドを振り返った。彼が見たものはスタンドに一直線に突き刺さったボールであった。

何とグラウンドスラムであった。しかも二試合連続の西武ナインはベンチで狂喜乱舞した。

秋山はゆっくりとダイヤモンドを回る。そしてホームインした。劇的な先制点であった。

「今の郭から五点取らなあかんのか。そんな事出来るかい」

野村は口を歪めた。これでこの試合はほぼ決まってしまった。その後試合は八回までお互い点が入らずに進んだ。しかしそれは西武にとつての勝利、ヤクルトにとつての敗北を意味する。ヤクルトにとつては何として覆さなくてはならない四点であった。

それでも八回に一点返す。そして九回にも。だが西武は潮崎を投入しヤクルトの執念を断ち切った。西武は秋山の貴重な一打を万全の備えで守りきった。これで互いに三勝、勝負は互角まで戻った。「流石やの、まさかここまでできて勝負を土俵の真ん中まで持って来るとは」

野村は言った。試合終了後のベンチで彼は森を見た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

対する森は何も語らない。だが彼は心の中でこれまでの試合を振り返っていた。

（ここまで来るだけでこれだけの力を使うとはな）

森にとつても余裕の無い戦いであった。そして使える策もカードも使って使って使い尽くしての勝利であった。

（だがまだ終わりではない。明日のこの時間に笑っているのがどちらかは神のみぞ知る）

彼はそう心の中で言っただけでベンチを後にした野村はその後ろ姿を黙って見送っていた。

「大方明日の事でも考えとるんやろな。胸上げの後どうコメントするか」

その言葉は半分は合っていたがあとの半分は間違っていた。  
「あいつらしいと言えばあいつらしいが。しかしわしにも意地はあるぞ」

彼はそう言うとブルペンへ電話をかけた。出て来たのはピッチングスタッフの一人であった。

「わしや」

野村は言った。そしてスタッフに問うた。

「あいつの調子はどうや」

スタッフはそれに対し答えた。

「問題ありません」

「よっしゃ」

彼はその言葉に笑った。そして満足した顔で電話を切った。

「これで明日の準備は万全や。どうやら雨はわしに味方してくれたみたいやな」

彼はそう言うとベンチを後にした。両者は戦場を去り明日の決戦に備えて休息に入った。

## 第七章

そして第七戦、最終戦となった。これで全てが決まる、二年越しの死闘もこれで決着が着こうとしている。

西武は中五日で渡辺である。第三戦で好投した彼に最後の勝負を託した。森はブルペンで彼の投球を無言で見っていた。

(頼むぞ)

彼は心の中で呟いた。マウンドは彼に託した。

対するヤクルトは川崎だった。第四戦での好投がものをいった。

しかし実は彼はあの時万全の調子ではなかった。発熱の為点滴を打ちながらの投球だったのだ。

しかし天が味方した。あの雨が彼に休む間を与えたのだ。

その為この日登板する事が出来た。彼は意気揚々とマウンドに上がった。

「さて、あとはあいつに任せるか」

野村は言った。そして遂に最後の戦いの幕が開けた。

まずはヤクルトの攻撃であった。広沢がバツクスクリン左へ特大のスリーランを放つ。三塁スタンドの傘が左右に振られる。

だが西武も負けてはいない。その裏清原がツーランを放つ。勝負は打撃戦に入るかと思われた。

しかし川崎も渡辺もこの一打で目を完全に覚ました。以後完璧な投球でそれ以上の得点を許さない。試合は投手戦に移行した。だが一回のアーチが両者の明暗を分けた。

ヤクルトは三点、西武は二点。この差は一点。だがその一点の差があまりにも大きかった。こうした時の投手の心理的な負担は大きい。そして相手チームにとってはまたとない励みとなる。その励みは一点でもさらに点を取っていかうというものになった。

六回表ヤクルトの攻撃であった。一塁には四球を選んだ古田がいる。ここで一回にホームランを放った広沢が打席に立つ。

広沢は右狙いで打った。打球は痛烈なライナーだった。セカンド  
辻の頭上を一直線に飛ぶ。

辻はそれを捕った。だがボールはグラブを弾き転がった。

広沢は突っ込んだ。一塁めがけ猛然と走る。間に合わない、そう  
判断した彼は頭から突っ込んだ。ヘッドスライディングだった。

ファースト清原の足下に砂埃が舞い上がる。観衆は静まり返った。  
だが判定は無情にもアウトだった。

広沢はベンチへ引き揚げる。だがその後ろ姿を見て両チームのフ  
アン達は彼の凄まじい執念を感じていた。そして感銘を受けていた。  
それは観衆だけではなかった。両チームのサインもそうであった。  
とりわけヤクルトサインは。

特に一塁ランナーだった古田はその一部始終をありありと見てい  
た。そして普段は冷静な彼の心に一段と激しい闘志が燃え盛ったの  
だ。

八回表。一死でバッターボックスに古田が入る。普段は静かな彼  
の眼が燃えていた。

打った。打球は左中間を破った。ツーベースかと思われたが彼は  
何と二塁を回った。

慎重な彼とは思えない行動だった。野村も森も驚いた。そして三  
塁へ頭から滑り込んだ。

セーフであった。これには皆啞然とした。

「余程の馬鹿か、その逆にとんでもない野球センスの持ち主やない  
と出来ん事やな」

野村はそのスリーベースを見て言った。古田の心は明らかに燃え  
盛っていた。

その炎を消す事は誰にも出来なかった。彼は再び突入する。

次のバッター広沢はピッチャーゴロだった。だが打球が思いの他  
強くピッチャーの頭を越えた。打球はショートまで向かった。

打球を捕った時田辺は驚愕した。何と三塁ランナー古田がホーム  
へ向けて突入していたのだ。相手の虚を衝く走塁は西武のお家芸で

あつたがその彼等ですら我が目を疑う古田の走塁であつた。

古田はホームを陥とした。これで貴重な追加点が入つた。狂喜する古田とヤクルトナインを西武ナインは呆然と見ていた。

「何という奴だ。あの場で突つ込むとは」

森は呟いた。そして彼の名を脳裏に焼き付けた。

森は後に横浜の監督となり古田と再び対峙する。しかし自慢の知略をことごとく打ち破られ一敗地にまみれる。そして彼は横浜の監督を去る事となつた。

この一点は貴重だつた。古田の信じられない走塁によつて得た一点、これはヤクルトにとつて待ち望んだものであつたのだ。

後はこの二点を守りきるだけである。野村はマウンドに高津を投入した。彼はこのシリーズで西武に一点も許さず二セーブを挙げている。最早西武に反撃の芽さえ与えぬつもりであつた。

九回裏西武の最後のバッター鈴木健のバットが空を切つた。勝負はこれで終わった。

ヤクルトナインがマウンドに駆け寄る。そして互いを抱き締め合う。野村がシューズに履き替えマウンドに向かう。そしてナインが彼を胸上げる。

「感謝、感謝、感謝です……」

最後のインタビューで彼は言つた。二年越しの長い戦いだつた。

しかし彼等はようやく王者西武に勝つたのだ。

ナイン達が三塁側のファン達の方へ向かう。彼等もまたヤクルトの日本一を信じ神宮から駆けつけてきたのだ。

古田が、飯田が、池山が、広沢が、秦が、ハウエルが。そこには荒木も西村も高津もいる。第四、第七で力投した川崎はシリーズ MVPにも選ばれたかつて弱小と馬鹿にされ続けたヤクルトが偽りの王者巨人はおるか他のどのチームも為し得なかつた王者西武の打倒を果たしたのだ。これ以上の喜びがあるうか。

かつての弱く笑ひ者であつたスワローズ。それが日本一になつた。九二年のシリーズがはじまつた時まさか今この場で勝利の喜びに包

まれると誰が想像したであろうか。

野村ID野球だけではない。選手の勝利への執念が日本一を呼び込んだ。荒木の力投、ハウエルの怒りの一打、池山の犠牲フライ、飯田のバツホーム、川崎の好投、高津のリリーフ、広沢のヘッドスライディング、そして古田の走塁。皆心の奥底から勝利を願った。そしてその為に一丸となった。その結果の勝利であった。

マウンドのところで記念撮影が行なわれる。野村を中心とした彼等の顔は喜びに包まれていた。

「俺達はもうあの頃とは違う！」

彼はそう言っていた。そしてその通りだった。長年西武が持っていた覇者の旗を奪い取り彼等は球界を制したのであった。

優勝パレードをする選手達。それは勝者のみに許される特権であった。彼等は勝利へ一丸となる素晴らしさを噛み締めていた。

その後ヤクルトは九五、九七、二〇〇一と三回日本一の座につく。そのシーズンはいずれも予想は低かったがそれを見事覆しての日本一であった。そのいずれも素晴らしい戦いであり素晴らしい戦士達がいいた。

あの戦いから十年が過ぎた。現役で残っている者はもう僅かである。だが彼等のあの戦いは今も我々の心に強く残っている。そして我々の心に深い感動を残し続けているのだ。

知と知の死闘 完

2004・1・3

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6982a/>

---

知と知の死闘 第二幕

2009年6月21日22時45分発行